

～たくさんの感想をいただきました。その一部をご紹介します。～

- お弁当の写真をみて『おいしそう！』と思いました。どの写真からも利用者さんの声が聞こえてきそうでした。
- 在宅介護の末、亡くなった母や、一人で暮らす父を思うと切ない思いになりますが、可哀相な高齢者ではなく、ただ懸命に生きる人間が写っていました。これからも良い写真を！
- ゴチャゴチャになった部屋、積みあがった衣類やらなにやら…片付けがイヤになってドアを閉めて出てきた。ストレスだ～と思って出てきたけど、福島さんの目を通して、そんな自分を見直していいんだ。嬉しい懐かしい気持ちかわいてきた。
- 老人の方々が生きようとしている姿を強く感じとることができました。忘れられがちな独居老人の方々の姿を見ることで、改めて私たち自身の問題であるということを確認しました。
- 独居高齢者の現実を見ました。日本は昔、長生きを喜び感謝の中で死を迎えていく国でした。写真の現実をみて「生きる美しさ」「生きる強さ」もあるのかもしれませんが、やはり何とかしなければならないことも痛感しました。私は議員です。大きな責任を感じました。
- 現実であるこの写真を見せていただいて、胸にこみあげてくるものがありました。
- 光の使い方がすばらしいです。立体感や人の人生の奥深さを感じました。
- どんなに元気な人も最後は皆老いていく。独り暮らしの人がどういう生活をしているか写真を見て、地域で支えていくとか、これから皆で考えていかななくてはならないと思う。
- 私は他の地域で小規模多機能施設にて働いています。まだ経験が浅く、衝撃的な現場に立ち合う事もあったり、逆に見習わせて頂く独居の利用者さんに出会ったりしています。写真から伝わってくる、お一人おひとりの「生」を感じ、日々の私の仕事の姿勢を改めて考え、がんばっていきましょうと思いました。
- 一枚一枚の写真をみながら、そのシーンにどんな物語があるのだろうと想像しました。写真家と被写体と作品を見る人。各々が持っている人生を奥深く思考させられる写真展でした。「生」の生々しさを感じました。
- 人生の肯定、自分自身の肯定すべての写真が語っているように思います。必死の表情、優しい笑顔、力強いまなざし、様々な表情に人生の重味を感じます。どんな状況でも生きぬくことは力強いですね。
- 吾はまだ、まだ、まだ、まだ、まだ、まだ、まだだよ。吾もまたこの人らのあとを行く



イラスト／小野実穂